

通説的価値尺度論の問題点について

——久留間鮫造・三宅義夫両氏の所説の検討——

松 田 清

目 次

はしがき

〔I〕 久留間鮫造氏の所説

〔II〕 三宅義夫氏の所説

むすび

は し が き

前稿でも確認したように、貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの規定は、“諸商品の価値量を計るための尺度となる”という「第1規定」と、“諸商品の価値量を表現するための材料となる”という「第2規定」とから成るのであるが、その場合、マルクスは、貨幣は“諸商品の価値量を計るための尺度となる”ことによって“諸商品の価値量を表現するための材料となる”，としているのであって、「第1規定」こそが貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの規定の根幹をなすものであることは明白だと言ってよい¹⁾。ところが、奇妙なことに、いわゆる「正統派」の内部で通説とされている価値尺度論にあっては、その肝心の「第1規定」が否定（ないしは度外視）され、専ら「第2規定」に依って貨幣の価値尺度機能が論じられていること、周知のとおりなのである。

もちろん、「第1規定」を否定（ないし度外視）し、専ら「第2規定」に依っているからといって、そのこと自体が直ちに問題なのではない。問題はあくまでも、それによって果たして

貨幣の価値尺度機能が首尾よく把握されえているのか否か、という点にある。しかし、結論を先に言うなら、私は「否」と言わざるをえない。それどころか通説的価値尺度論は、まさしく「第1規定」を否定（ないしは度外視）したがいゆえに貨幣の価値尺度機能の把握を誤り、専ら「第2規定」に依拠するがゆえに「総じて価格があるかぎり、『観念的な金』は存在し、価値尺度機能は遂行されているという通俗的理解」²⁾に途を開いてしまった、と言っても過言ではないと思うのである。しかも今日、「インフレーションの本質を、流通すべき金量（流通必要金量）をこえた紙幣（不換紙幣、より一般的にいえば不換通貨）の過剰発行、それによって生ずる価格の度量標準の事実上の切り下げ、その結果としての価格の名目的な騰貴、これらの点に求めるのが、マルクス経済学者のあいだの通説となっている」³⁾わけであるが、私見では、そうした通説的インフレーション論を根底において支持しているものこそ、貨幣の価値尺度機能についてのかの「通俗的理解」にほかならない⁴⁾。この意味で、通説的価値尺度論の問

2) 高須賀義博『現代のインフレーション——構造論的接近——』新評論、1981年、11ページ。因に、高須賀氏も、「マルクスは貨幣の価値尺度機能を、一般的等価物としての金が諸商品の価値表現の素材を提供することであると規定し」ている、としか理解されていない（同前参照）のであって、その限りでは通説的価値尺度論のマルクス理解におもねられておられるのである。

3) 建部正義「現代インフレーション論」（金子ハルオ編『講座 マルクス主義研究入門 3』青木書店、1974年、所収）215ページ。

4) この点に関連して、私は竹村脩一「価格の度量標準と流通必要金量の概念」（高木暢哉編著『現

1) 拙稿「マルクスの『価値尺度』論について——宇野弘蔵氏のマルクス批判を手掛りに——」（阪南大学『阪南論集 社会科学編』第20巻第3号所収）参照。

題点を明らかにすることは、また勝れて今日的な課題でもあるのである。

およそ以上のような問題意識から、私は以下において、しばしば通説的価値尺度論を代表するものとして扱われる久留間鮫造・三宅義夫両氏の所説を検討してみることにはしたい。両氏の所説は、無論細部においては相異なるけれども、法則レベルの価格（法則を論じる際にマルクスが常に仮定している「価値どおりの交換または販売」に対応するところの“価値どおりの価格”）と現象レベルの価格（価値と価格の乖離を問題にする際に常に意識されている具体的な実際の売買価格）との区別⁵⁾を見ず⁶⁾、現象レベルの価格においても直接に価値が表現されているとする点では、完全に一致している。そしてまさにその点において、両説は通説的価値尺度論を代表するものとなっているのである。しかし、たしかに法則レベルの価格は直接に価値を表現するものであるが、現象レベルの価格は、直接には価値を表現するものではなく、直

接にはただ交換価値を表現するものであるにすぎない⁷⁾。それゆえ、両者を明確に区別してかかるのでなければ、マルクスの「価値尺度」論は到底理解すべくもないのである。私は以下において、久留間・三宅両氏の所説の検討を通して、そのことを明らかにしたいと思う。

〔I〕 久留間鮫造氏の所説

まず、久留間鮫造氏の所説を検討することから始めよう。

久留間氏は、貨幣の価値尺度機能を規定して、次のように述べられている。

「価値の価格としての表示は、貨幣としての金の媒介によってはじめて可能なのであり、この媒介的な機能において、貨幣金は価値の尺度なのである。これこそが、価格の、したがってまた価値尺度としての貨幣の機能の、質的な面であり、根本である。」⁸⁾

見られるとおり、久留間氏はマルクスの「第2規定」に依って貨幣の価値尺度機能を規定されるのであるが、その際の氏の所説の特徴は、「価値尺度としての貨幣の質的な面」を強調され、しかもそれを「価値尺度としての貨幣の機能の根本である」とされる点にある。まさしくそこに久留間説の核心があるのであって、したがってわれわれはまず、氏の言われる「質的な

代の貨幣・金融』ミネルヴァ書房、1980年、所収)における問題提起に注意を喚起したい。

5) 田中菊次氏が「マルクスの叙述の検討」に際して、「マルクスの種々の価格規定」として①「価値形態としての価格」②「商品価値の指標としての価格」③「商品の貨幣との交換関係の指標としての価格」という三つの価格規定を区別され、①・②の規定と③の規定との間に「マルクスにおける理論的断層」を見出されたとき、氏はマルクスの「価値尺度」論を合理的に理解するための確かな手掛りをつかんでおられたのである。にもかかわらず田中氏は、その「断層」を法則レベルの価格規定と現象レベルの価格規定との間のそれとして明確に把握することをされなかったために、「問題解決のこころみ」において必ずしも成功しないままに終られざるをえなかったのである。同氏著『資本論』の論理 増補版、新評論、1978年、第2篇第1章参照。

6) この限りでは宇野弘蔵氏の所説も例外でないこと、すでに前稿で見たとおりである（前掲拙稿参照）。従来の価値尺度論においては、「もし事物の現象形態と本質とが直接に一致するものならばおよそ科学は余計なものであろう」というマルクスの箴言がなぜか閑却されているように思われてならない。

7) ヒルファディングも言う。「すべての商品の交換価値は、貨幣商品において、その使用価値の一定量において、社会的に妥当するものとして表現される。」(Rudolf Hilferding, *Das Finanzkapital—Eine Studie über die jüngste Entwicklung des Kapitalismus*, Europäische Verlag, 1968, S. 34. ルードルフ・ヒルファディング『金融資本論』改版《岡崎次郎訳》、岩波書店、1982年、33ページ)と。しかしヒルファディングにあっては、かく言う意味が明確ではない。彼のいわゆる「社会的流通価値」なる概念もその点と無縁ではないと思われるのであるが、そうした問題については別の機会に論じてみることにしたい。

8) 久留間鮫造『貨幣論——貨幣の成立とその第一の機能（価値の尺度）——』大月書店、1979年、178ページ。

面」とはいかなる含意のものであるのか、ということを確認してからならなければならない。

A

久留間氏が「質」について語られるのは、ひとつには、もちろん「量」に対比されてのことである。上に引用した文章にすぐ続けて、氏はこう言われている。すなわち、「宇野君の主張は、量の問題に――マルクスの言葉をかりて言えばブルジョア的なインタレストに――注意を奪われて、この肝心かなめな質的な面を忘れたものと言わねばならぬ。」⁹⁾と。久留間氏がこのように宇野説を批判されるのは、氏の理解されるところ、宇野説は「たんに、実際に売られる場合の価格の高さの決定がなにによってなされるかを問題にするものにすぎない、価格の量的規定を問題にするものにすぎない」¹⁰⁾からにはかならない。しかし、「それ〔実際に売られる場合の価格〕が誰によって、あるいはなにによって決定されるにしても、また、その価格が価値を表示するものとして高すぎようが低すぎようが〔つまり、『価格の量的規定』に関わりなく〕、それは価格であることに変わりはない。なぜなら、それは、貨幣としての金の形態における価値の表現だからである。」¹¹⁾この「貨幣としての金の形態における価値の表現」こそ「価格の質的規定」なのであるから、そこにおける

価値尺度としての貨幣金の「媒介的な機能」は「質的」なのだ、と言われるわけである。

他方、久留間氏は、「価値の価格としての表示を可能にする貨幣＝金の媒介的機能こそ、価値尺度の質的な面だ」（同前、177ページ）とされる理由を、次のように説明される。

「商品生産者の労働は直接には私的な労働であって社会的労働ではない。それは、貨幣の形態ではじめて社会的労働として現われる。だから、貨幣は、私的な労働が社会的労働になるための一つのモメントをなす、そういう意味で質の問題だというわけです。」¹²⁾

たしかに、久留間氏も援用されているように¹³⁾、マルクスも、「商品の貨幣としての表示のなかには」、上に久留間氏が言われているような「質的な側面」が含まれている、ということ強調している。しかしその場合でもマルクスは、「商品の貨幣としての表示のなかには、ただ、諸商品の価値量の相違が、排他的な一商品の使用価値での自分たちの価値の表示によって計られる、ということが含まれているだけではない。同時に、次のことが含まれている」と述べて、その「次のこと」の内容として「質的な側面」に言及しているのであって、マルクスが、「商品の貨幣としての表示」という一個同一の事象の内に、「諸商品の価値量の相違が、排他的な一商品の使用価値での自分たちの価値の表示によって計られる」という側面（言わば「量的な側面」）と、「諸商品に含まれている私的な諸個人の労働の、同等な社会的労働への転化」という「質的な側面」とが「同時に」含まれている、と述べていることは明白なのである¹⁴⁾。しかも、マルクスがそう述べているのも

9) 同前。

10) 同前、177ページ。因に、宇野弘蔵氏が「実際に売られる場合の価格の高さの決定がなにによってなされるかを問題に」されていることは疑いなし事実であるけれども、宇野説は「たんに」それだけを「問題にするものにすぎない」わけではない。むしろ、「価値尺度としての貨幣の機能の質的な面」に対比される「量的な面」を、久留間氏が「販売価格の高さの決定という量的な面」（同前）というふうにしにしか把握されていないことこそ、ここでは問題にされなければならない。この点、後に明らかにするとおりである。なお、阿部真也「現代の流通と価格の決定」（高木編著、前掲書、所収）参照。

11) 久留間、前掲書、177―178ページ。〔 〕内一引用者。

12) 同前、182ページ。

13) 同前、181ページ以下参照。

14) Vgl. Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert* (Vierter Band des "Kapitals"), 3. Teil, in Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 26, 3. Teil, S. 127f. カール・マルクス『剰余価値学説史』Ⅲ、『マルクス＝エンゲルス全集』第26巻第3分冊所収（岡崎次郎・時永淑訳）、167ページ以下参照。以下、本書からの引用に際しては、*Theorien III*

当然のことだとしなければならない。なぜなら、マルクスの言う如く「価値形態は、価値一般だけではなく、量的に規定された価値すなわち価値量をも表現しなければならない」¹⁵⁾ のであってみれば、「私的な労働が社会的労働になる」という価値表現の「質的な側面」は、“一定量の価値が一定量の金で表現される”という価値表現の“量的な側面”と別にあるものではなく、むしろ、“一定量の価値が一定量の金で表現される”ことによってはじめて「私的な労働が社会的労働になる」こともできる、という関係にあるのだからである。

ところが、それにもかかわらず久留間氏は、マルクスが現に論じている“量の問題”を完全に度外視され、「質の問題」として「私的な労働が社会的労働になる」という点だけを一面的に強調される。それというのも、氏は“量の問題”を「実際に売られる場合の価格の高さの決定がなにによってなされるか」という現象レベルの問題としてしかとらえておられず、“一定量の価値が一定量の金で表現される”という法則レベルの本来の“量の問題”を見失っておられるからにはほかならない。先に見たように久留間氏は「価値の価格としての表示は、貨幣としての金の媒介によってはじめて可能なのであり、この媒介的な機能において、貨幣金は価値の尺度なのである。」と言われるのであるが、本来の問題は、その「媒介的な機能」を貨幣金はいかにして果たしうるのか、という点にあるのである。然るにそうした問題は、久留間氏の

視野には入りようがない。なぜなら、久留間氏は、「商品の価値が他商品の使用価値で表現されるということは、われわれが日常の経験から直接に確認しうる明白な事実である」¹⁶⁾ と言われ、現象レベルの価格をしも価値を直接に表現するものであるかの如くに誤認されているからである。もし現象レベルの価格が直接に価値を表現するものであるとするならば、「その価格が価値を表示するものとして高すぎようが低すぎようが」、「それは、貨幣としての金の形態における価値の表現だ」ということになるのであって、かくして、価格がある限りそこに貨幣金の「媒介的な機能」が働いているのだということは、何ら議論の余地なきことにならざるをえない。だから、その「媒介的な機能」がいかにして果たされうるか、などという問題は、久留間氏の論理の内では元来ありうべくもないのである。

だが、「商品の価値が他商品の使用価値で表現されるということは、われわれが日常の経験から直接に確認しうる明白な事実である」と主張されることは、あたかも「事物の現象形態と本質とが直接に一致する」ものであるかの如くに主張されることにはほかならない。「われわれが日常の経験から直接に確認しうる明白な事実」は、単に、諸商品の交換価値の大きさが貨幣で表現されている、ということにすぎない。この交換価値の分析がわれわれを価値の認識に導き、交換価値が価値の現象形態にほかならないことを知らしめるのである¹⁷⁾。これは、いか

と略記し、*Werke* 版原書のページ数のみを示す（訳文はすべて邦訳『全集』版の岡崎次郎・時永淑両氏の訳による）。

- 15) Karl Marx, *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, 1. Band, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, 23. Band, S. 67. カール・マルクス『資本論』第1巻、『マルクス＝エンゲルス全集』第23巻所収（岡崎次郎訳）、72ページ。以下『資本論』から引用する場合には、各巻を K. I, K. II, K. III と略記し、*Werke* 版原書のページ数とともに各引用文の末尾に付記する（訳文はすべて邦訳『全集』版の岡崎次郎氏の訳による）。

- 16) 久留間鮫造『価値形態論と交換過程論』岩波書店、1957年、53ページ。

- 17) 「私が出発点とするものは、いまの社会で労働生産物がとる最も簡単な社会的形態であり、そしてこれが『商品』である。それを私は分析するのであり、しかもまず第一にそれが現われる形態においてである。さてここで私は、それが一方ではその現物形態では使用物、別な言い方では使用価値であり、他方では交換価値の担い手であり、この観点からはそれ自身『交換価値』であることを発見する。後者をさらに分析してみると、交換価値は商品にふくまれている価値の『現象形態』、

にも“揚げ足取り”をして“釈迦に説法”をするものように見えるかもしれないが、決してそうではない。現象レベルの価格が直接には交換価値の大きさを表現するものであり、かく交換価値の大きさを表現することが価値の大きさを表現するための社会的に妥当な仕方なのだという認識が、従来の価値尺度論には決定的に欠けているのである。そしてそのことが、逆に、法則レベルの価格は直接に価値を表現するものであるがゆえにそこでは価値の大きさが測定されなければならないのだ、という本来の“量の問題”を見失わせているのである。

こうして、久留間氏には法則レベルの価格と現象レベルの価格とを明確に区別する視点がないために、氏は法則の問題を「質の問題」と取り違えられ、現象の問題を“量の問題”と取り違えてしまわれたのだと思われるのであるが、その点を明らかにする前に、本来の“量の問題”を度外視される久留間氏の『『尺度』』という言葉の使い方」を検討しておくことにしよう。

B

久留間氏は、宇野弘蔵氏の所説における『『尺度』』という言葉の使い方」を批判して、こう言われている。すなわち、「宇野君にあっては、価値を尺度するということは、与えられた価値の大きさを尺度することではなく、価値の大きさそのものをきめること、本来的には存在しない価値の量的規定をはじめてつくり出すこと、を意味するように思われる」が、これは「まことに異様な『尺度』という言葉の使い方だ¹⁸⁾、と。そして言われる。「もちろん、ある言葉をどういう意味に使うかは、ある程度までは使う

人の勝手といえるが、それにもおのずから限度がある。『尺度』という言葉を使い込んだような意味で使うとすれば、それはあまりに奇抜であり、無理というものです。」¹⁹⁾と。たしかに、こうした批判は正鵠を射たものである。問題は、宇野氏における「尺度」という動名詞の用語法に対するそうした批判から、久留間氏自身における「尺度」という普通名詞の用語法は免れえているか、という点にある。

『『尺度』』という言葉が普通の意味に解するかぎり、「価値の尺度」と言えば“価値の大きさ(価値量)を計るための尺度”ということではなければならない。事実、マルクスもそういう「普通の意味」で「尺度」という言葉を使っている。ところが久留間氏は、「媒介的な機能において、貨幣金は価値の尺度なのである」と言われるのである。この場合久留間氏は、既述の如く貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの「第2規定」に依っておられるわけであるが、“諸商品の価値量を表現するための材料となる”という「第2規定」だけについて言うなら、その限りでは貨幣は“価値の表現材料”にすぎず、何ら「価値の尺度」たるものではない。ただマルクスにあっては、貨幣が“価値の表現材料”になりうるのはそれが“諸商品の価値量を計るための尺度”すなわち「価値の尺度」たるからであって、そうした関連において“諸商品の価値量を表現するための材料となる”という規定が「価値の尺度」の「第2規定」の位置を占めているのである。

然るに久留間氏は、その肝心要の“諸商品の価値量を計るための尺度となる”というマルクスの「第1規定」を完全に度外視され、なおかつ“諸商品の価値量を表現するための材料”たることを以て「価値の尺度」とされる。いったい、それがいかなる意味で「尺度」だと言われるのか？ 久留間氏の所説には、その点の解明がまるでないのである。久留間氏の用語法もまた「まことに異様な『尺度』という言葉の使い方」だと言わなければなるまい。

独立した表示の仕方であることが私にわかり、ついで私は後者の分析にとりかかる。」(カール・マルクス「アドルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍注、『マルクス＝エンゲルス全集』第19巻所収《杉本俊朗訳》、369ページ。傍点＝マルクス。)

18) 久留間『貨幣論』、225ページ参照。

19) 同前。

貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの「第1規定」を（意識的にであれ無意識にであれ）無視しておきながら、なおかつ「価値の尺度」を論じようとするのがもともと背理なのであるが、それにもかかわらず、通説的価値尺度論が別段その点を異としなないでいられるのは、暗黙の内に、価格の度量標準たる機能に即して自らの『『尺度』という言葉の使い方』に得心しているからなのであろう²⁰⁾。けれども、言うまでもなく「価値の尺度」では諸商品が価値として計られるのであるが、これにたいして、価格の度量標準は、いろいろな金量がある一つの金量で計る（*K.I.*, S. 113）のであって、価格の度量標準たる機能を以てしても、通説的価値尺度論が「価値の尺度」という場合の「まことに異様な『尺度』という言葉の使い方」は、なお依然として少しも変わりはないのである。

C

このように久留間氏が「まことに異様な『尺度』という言葉の使い方」をされざるをえないのは、直接には貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの「第1規定」を完全に度外視されるからであるが、氏がマルクスの「第1規定」を度外視されるのはまた、法則レベルの価格と現象レベルの価格とを明確に区別されていないからであり、法則の問題を「質の問題」と取り違えられ、現象の問題を“量の問題”と取り違えてしまっておられるからなのである。

先に指摘したように、久留間氏は“量の問題”を「実際に売られる場合の価格の高さの決定がなにによってなされるか」という現象レベ

ルの問題としてしかとらえられていないのであるが、本来の“量の問題”は、“一定量の価値を一定量の金で表現する”ということの内にすでに孕胎されているのである。その点はつとに宇野弘蔵氏の指摘されていたところであって、氏は次のように述べておられたのである。

「商品の価値は、われわれが常識的に考える長さや重さのように単なる尺度をもって計量せられ得るものではない。物指にしてもあてて見なければ長さは測られないが、あてて見れば計量出来る。商品ではそういうふうに外部的には計量出来ない。」²¹⁾

ここではたしかに、宇野氏は「量」を問題にされている。しかしそれは、「宇野君の主張は、量の問題に——マルクスの言葉をかりて言えばブルジョア的なインタレストに——注意を奪われ」たものだ、と言って済ませられるものではない。宇野氏は、マルクスが「商品の価値は、われわれが常識的に考える長さや重さのように単なる尺度をもって計量せられ得るものである」かのように論じているものと解され、それに対して「商品ではそういうふうに外部的には計量出来ない」のだと批判されているのである²²⁾。だから問題は、マルクスが宇野氏の言われる如くに論じているのか否か、（論じているとすれば）宇野氏の批判は正しいのか否か、ということでなければならない。ところが久留間氏は、その点には少しも触れられないで、次のように述べて宇野氏と見解を共にしてしまうのである。

「〔商品生産者の労働が〕はじめから社会的労働としてあるなら、その分量は労働時間できまり、労働時間は時計ではかることができ

20) 大島雄一氏が貨幣は価値の尺度ではなく「価格計算の尺度」だと言われるとき、氏は「尺度」という言葉を「普通の意味」で使おうとされているのであって、そのことによって通説的価値尺度論の本来の含意を異説という形で示されているのである。かかる大島説の問題点については、後に触れる折があるだろう。

21) 『宇野弘蔵著作集』第1巻、岩波書店、1973年、45ページ。

22) 「もともと商品は、マルクスにあっては、いずれもその生産に社会的に必要とせられる労働の対象化した価値物として価値形態をも与えられるのであって、等価物は直接にその価値によって相対的価値形態にある商品の価値を測定し、表示するかの如くに扱われるのである。」（『宇野弘蔵著作集』第9巻、岩波書店、1974年、196ページ。）

るわけで、その場合には物指で空間的な長さをはかるのと本質的な違いはない。ところが価値の場合にはそうではない。」²³⁾

たしかに、商品の価値が「外部的に」「物指で空間的な長さをはかるのと本質的な違いはない」ような仕方では計量されうるものではない、ということは両氏の言われるとおりなのである。自明の事柄だと言ってよい。しかし、そうした自明の事柄に照らして見ればすこぶる奇妙なことに、マルクスは現に、「外部的に」「物指で空間的な長さをはかるのと本質的な違いはない」ような仕方では価値が計量されうるものとして論じているのである。例えば、『資本論』では次のように述べてある。

「諸商品は、貨幣によって通約可能になるのではない。逆である。すべての商品が価値としては対象化された人間労働であり、したがって、それら自体として通約可能だからこそ、すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の商品で共に計ることができるのであり、また、そうすることによって、この独自の商品で自分たちの共通な価値尺度すなわち貨幣に転化させることができるのである。」(K. I, S. 109.)

これに対して、久留間氏は言われる。「商品は価値としては抽象的・人間的労働の対象化であるといっても、それはラテン語にそうであるにすぎないのであって、直接的にそういうものとしてあるわけではない。金というかたちではじめて、商品生産者の労働は抽象的・人間的労働として、そしてそれによってまた社会的な労働として現われる。」²⁴⁾と。久留間氏の言われる如く「商品は価値としては抽象的・人間的労働の対象化であるといっても、それはラテン語にそうであるというにすぎ」ず、「金というかたちではじめて、商品生産者の労働は抽象的・人間的労働として、そしてそれによってまた社会的な労働として現われる」のだとすれば、「諸商品は、貨幣によって通約可能になる」ほかあるまい。

けれどもマルクスは、「諸商品は、貨幣によって通約可能になるのではない。逆である。」と、久留間氏とは全く正反対のことを言っているのである。それというのも、久留間氏が「商品は価値としては抽象的・人間的労働の対象化であるといっても、それはラテン語にそうであるというにすぎない」とされるのに対して、マルクスは「すべての商品が価値としては対象化された人間労働であり、したがって、それら自体として通約可能だからこそ、すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の商品で共に計ることができる」としているからにはほかならない。

この後の方の点は、『剰余価値学説史』では、いっそう詳しく論じられている。そこではマルクスは、次のように述べているのである。

「諸商品が交換されるのは、それらが等量の労働時間を表わす関係においてであるとするれば、対象化された労働としての諸商品の定在、つまり、具体化された労働としての諸商品の定在とは、諸商品の単一性、諸商品の同一要素のことである。このようなものとして諸商品は質的に同じであり、ただ、それらが表わす同一物すなわち労働時間の大小に応じて、量的にだけ区別される。諸商品は、この同一なものの表示としては価値であり、等量の労働時間を表わすかぎりでは、等しい大きさの価値、等価物である。諸商品を大きさとして比較するためには、前もって諸商品が、同名の大きさ、質的に同一なものでなければならぬ。

このような単位の表示としてこそ、これらのいろいろな物は価値なのであり、また価値として相互に関係し合うのであって、それによって、それらの価値の大きさの相違、それらの内在的な価値尺度も与えられるのである。また、それだからこそ、一商品の価値は、その商品の等価物としての他の商品の使用価値で表わされ表現されうるのである。」²⁵⁾

ここでは、「諸商品が交換されるのは、それらが等量の労働時間を表わす関係においてであ

23) 久留間『貨幣論』, 182ページ。

24) 同前。

る」ということが（つまり「価値どおりの交換」が）、のっけから仮定されていることに注意しなければならない。それによって、法則を問題にしているのだということが明示されているのである。久留間氏がマルクスの「価値尺度」論を、そのあるがままに理解されえないのは、その点を閑却されるからにはほかならない。「価値どおりの交換または販売」(K. III, S. 197) という仮定を取り払って、したがって現象レベルで、考察するならば、そこでは価値はすでに交換価値として現象してしまっているわけであるから、直接には「価値の表現」ではなく「交換価値の表現」しか、もはや問題になりえない。そのレベルでは、価値がもはや計量されえないものたること、当然なのである。久留間氏は、その点に執着される²⁶⁾。しかし、マルクスが「価値の表現」について論じているのは、そうした現象レベルでのことではないのである。「価値どおりの交換または販売」の仮定された純粋な法則レベルのことなのである。

「諸商品が交換されるのは、それらが等量の労働時間を表わす関係においてであるとすれば」、ただ「等量の労働時間を表わす」商品どうしだけが交換されるのであるから、「諸商品は質的に同じであり、ただ、それらが表わす同一物すなわち労働時間の大小に応じて、量的にだけ区別される。」その場合には、「諸商品は、この同一なものの表示としては価値であり、等量の労働時間を表わすかぎり、等しい大きさの価値、等価物である」から、ある商品に対し

て、それと等しい価値を有する別の商品と等置することができる。「それだからこそ、一商品の価値は、その商品の等価物としての他の商品の使用価値で表わされ表現されるのである。」そして、それだからこそまた、ある商品に対して、それと等しい価値を有する量を等置することができるのであり、一商品の価値を、その商品の等価物としての金で表現することもできるわけである。

法則を問題にする限りでは、諸商品の価値の大きさは直接に価値の大きさとして——したがってまたその大きさどおりに——表現されなければならないのであって、さればこそマルクスは、価値が「外部的には」「物指で空間的な長さをはかるのと本質的な違いはない」ような仕方では計量されるものでないことを承知の上で、なおかつそのように計量されるものと仮定して、そうした計量における文字通りの尺度たるものとして貨幣の価値尺度機能を規定しているのである。だから逆に言えば、マルクスは法則を問題にしているのだ、ということが理解されない限り、マルクスの「価値尺度」論は到底理解され難いものとならざるをえないのである。然るに久留間氏は、法則の問題を「質の問題」と取り違えられてしまう。

もちろん、そうは言っても、久留間氏ほどの人がマルクスが何を問題にしているかを知られぬわけがない。氏は次のように言われているのである。

「価値が金で表示され、価格の形態をとるということ、このことはいったい、商品生産にとってどのような意味をもつかという問題、これこそわれわれは、先ず第一に明らかにしなければならぬ、とマルクスは考えているわけです。」²⁷⁾

まさしく久留間氏の指摘されるとおりなのであって、マルクスは、「諸商品としての諸生産物の交換は、労働を交換し、各人の労働が他人の労働によって定まる一定の方法、社会的な労

25) *Theorien III*, S. 124f. 下線—マルクス。傍点—引用者。

26) 「だが、『価値』が、絶対的なものではなく、一つの実在物 (entity) としては把握されないということは、諸商品が、自分たちの交換価値に、一つの独立な、自分をその使用価値または現実の生産物としての自分たちの定在とは違った、それとはかわりなく存在する一つの独立な表現を与えなければならないということ、言い換えれば、商品流通が貨幣形成にまで進行しなければならないということ、とはまったく別なことである。」(*Theorien III*, S. 127f. 傍点—マルクス。)

27) 久留間『貨幣論』, 180ページ。

働または社会的な生産の一定の様式である。』²⁸⁾と述べた後で、次のように論じているのである。

「労働は、私的個人の労働であって、一定の生産物に表わされている。しかしながら、価値としては、生産物は社会的労働の具体化でなくてはならないし、またそのようなものとして、ある使用価値から他のすべてのどんな使用価値にも直接に転化が可能でなくてはならない。(その労働が直接に表わされる一定の使用価値は、なんであってよい。それゆえ、ある形態の使用価値から他の形態のそれへの転換が可能なのである。)だから私的労働は、直接、その反対物として、社会的な労働として、表わされなくてはならない。このような転化された労働は、その労働の直接の反対物としては、抽象的 一般的労働であり、したがってまた、一つの一般的等価物で表わされる労働である。このような労働の譲渡によってのみ、個人の労働は、現実、その反対物として表わされるのである。だが、商品は、それが譲渡されるより前に、このような一般的表現をもたなければならない。個人の労働を一般的労働として表示するこの必然性は、一商品を貨幣として表示する必然性である。この貨幣が、尺度として、また商品の価値の価格での表現として役立つかぎり、商品はこのような表示を受け取る。』²⁹⁾

久留間氏も言われる。「商品生産は直接社会的な生産ではない。商品を生産する労働は当初から社会的な労働なのではなく、直接には私的な労働です。そういうものから社会的生産の体制が生じるためには、商品生産者の私的な労働はなんらかの契機において、なんらかの形態において、社会的労働にならねばならぬ。ではどのような形態で、商品生産者の労働は社会的労働になるかという、けっきょく、金の姿では

じめてそういうものになる。』³⁰⁾と。それにもかかわらず、久留間氏はそこに在る“量の問題”をやはり度外視され、一面的に「質の問題」だけを強調されるために、マルクスは法則を問題にしているのだ、という肝心要の点が一向に明確にされず、却って見失われる結果となってしまっているのである。

マルクスが「私的労働は、直接、その反対物として、社会的な労働として、表わされなければならない」と言うとき、彼は決して“量の問題”を離れてそう言っているのではない。「諸商品としての諸生産物の交換」が「労働を交換し、各人の労働が他人の労働によって定まる一定の方法、社会的な労働または社会的な生産の一定の様式」たる実を示しえんがためには、諸商品の生産に社会的に必要な労働時間が価値という形態を受け取るばかりでなく、その価値が何らかの仕方で“価値どおりの価格”として表示されるのでなければならない。そうでなければ、労働の交換が適正に行われえず、各人の労働が他人の労働によって適正に定まりえないのであって、それゆえまた、「諸商品としての諸生産物の交換」が「社会的な労働または社会的な生産の一定の様式」たる実を示すこともできないからである³¹⁾。そこで、諸商品の価値が“価値どおりの価格”として表示されている状態を仮定すれば、すなわち、「諸商品としての諸生産物の交換」が「社会的な労働または社会的な生産の一定の様式」たる実を示している状態を仮定すれば、その場合には、まさしく貨幣は、“諸商品の価値量を計るための尺度”として、したがってまた“諸商品の価値量を表現するための材料”として機能せざるをえない。ここにこそ、マルクスが「価値どおりの交

28) *Theorien III*, S. 127.

29) *Ebenda*, S. 133. 下線—マルクス。傍点—引用者。

30) 久留間、前掲書、180ページ。なお、この点は、久留間鮫造・玉野井芳郎『経済学史』改版、岩波書店、1977年（初版1954年）、82ページ以下で、詳しく展開されている。

31) 「諸商品の価値どおりの交換または販売は、合理的なものであり、諸商品の均衡の自然的法則である。」(*K. III*, S. 197.)

換または販売」を仮定し、そうした仮定の下で「価値の尺度」を論じた所以が存するのである³²⁾。

かくて明らかなように、マルクスの「価値尺度」論を合理的に理解するための鍵は、久留間氏の如くに「質の問題」を“量の問題”から区別することにあるのではない。肝要なのは、まさに法則の問題と現象の問題との区別と連関を明確にすることなのである。

〔Ⅱ〕 三宅義夫氏の所説

A

次に、三宅義夫氏の所説を検討しよう。

氏は、貨幣の価値尺度機能を規定して、次のように言われている。

「商品がその価値を貨幣商品金で表現するばあい、金は価値の一般的尺度として、つまり価値尺度として機能しているのであり、商品の価値を金で表わしたものが、その商品の価格である。」³³⁾

こうした規定は、すでに見た久留間氏のそれと軌を一にするものであるから、ここでもまず、久留間氏に対してと同様に、もし貨幣の価値尺度機能が真に三宅氏の言われるようなものであるとするならば、それは“価値の（一般的）表現材料”とでも呼ばれて然るべきであるのに、何故にわざわざ「誤解されやすい」「尺度」などという言葉を用いなければならないのか、ということが問われうるのであるが、三宅氏はその点には一言もされることなく、逆に読者を次のように戒められるのである。

「ここで誤解されやすい若干の点について説明をつけ加えておこう。まず価値尺度の尺度という言葉にとらわれて、商品の価値の大

きさが大きさとおりに金の分量で表現されることになるのだ、価値尺度というからには、商品価値の大きさを大きさとおりに測定し表現するのではなければならぬ、そうでなければ価値尺度として機能するということが意味をなさない、と考えてはならない。」³⁴⁾

なぜ、そう考えてはならないのか？ 三宅氏は、上の文章にすぐ続けて、次のように言われる。

「 x 量の商品Aの価値の大きさは x 量の商品 $A=y$ 量の金として表現されるのであるが、この相対的価値表現においては、価値形態、価値表現においてつねにそうであるように、双方に含まれている社会的必要労働時間が等しいことを必ずしも意味しているものではない。 y 量の金は x 量の商品Aの価値の大きさの表現として、あるいは過小でありあるいは過大であるかもしれない。しかし過小であろうと過大であろうと、 y 量の金は等価形態にあり、 x 量の商品Aの等価物であることには変わりはないのである。」³⁵⁾

三宅氏のこうした戒めに接して、私は納得しうるところか、むしろ逆に次のような疑問を抱かざるをえない。

- ① x 量の商品Aの価格が y 量の金であるとき、この y 量の金の価値の大きさが x 量の商品Aのそれよりも大きかろうと小さかろうと、 y 量の金は「 x 量の商品Aの等価物であることには変わりはない」か？
- ② 価値形態、価値表現においては「つねに」、等式の「双方に含まれている社会的必要労働時間が等しいことを必ずしも意味しているものではない」か？
- ③ y 量の金の価値の大きさが x 量の商品Aのそれよりも大きかろうと小さかろうと、「 x 量の商品Aの価値の大きさは x 量の商品 $A=y$ 量の金として表現される」か？

もちろん、私が以上のような疑問を抱かざるをえないのは、これらの点において、三宅氏の

32) この点についてはなお前掲拙稿をも参照されたい。

33) 三宅義夫「貨幣の諸機能」（遊部久蔵他編『資本論講座 1』青木書店、1963年、所収。以下、「三宅①」と略記）、235ページ。

34) 同前。

35) 同前。

所説はどうもマルクスのそれとは違うのではないかと思われるからである。例えば①の「等価物」という概念についてみれば、『剰余価値学説史』から先に引用したマルクスの文章の中には、「諸商品は、この同一なもの〔労働時間〕の表示としては価値であり、等量の労働時間を表わすかぎりでは、等しい大きさの価値、等価物である。」という命題が含まれていた。等価物とは読んで字の如く等しい価値を有する物だ、と言うのである³⁶⁾。しかもその点は、『資本論』においても何ら異ならない。価値形態論の「等価形態」の項を見ると、そこでは次のように述べられてある。

「ある一つの商品種類、たとえば上着が、別の商品種類、たとえばリンネルのために、等価物として役だち、したがってリンネルと直接に交換されうる形態にあるという独特な属性を受け取るとしても、それによつては、上着とリンネルとが交換されうる割合はけっして与えられてはいない。この割合は、リンネルの価値量が与えられているのだから、上着の価値量によって定まる。」(K. I, S. 70.)

36) 別のところでは、マルクスは次のようにも述べている。

「3重量ポンドのコーヒーと1重量ポンドの茶とが今日交換される、または明日交換されるであろうとすれば、その場合、等価物が相互に交換された、とはけっして言えない。仮りにそうだとすると、商品はいつでもその価値どおりに交換されうることになるであろう。なぜなら、商品の価値は、その商品がたまたまそれと交換される他の商品のまったく任意の量であることになるであろうからである。しかし、3重量ポンドのコーヒーが茶でのその等価と交換されたと言う場合に、人々が一般に考えていることは、こんなことではない。彼らが考えていることは、交換後も交換前と同様に同じ価値の商品が、交換したどちらの人の手のなかにもある、ということである。二つの商品の交換される割合が、それらの商品の価値を規定するのではなく、それらの商品の価値が、それらの商品の交換される割合を規定するのである。」(Theorien III, S. 129f. 下線—マルクス。傍点—引用者。)

傍点—引用者。)

ここでもやはり、等価物とは相対的価値形態に立つ商品の価値の大きさと等しい価値の大きさを有する物の謂であつて、三宅氏の言われるようにY量の金の価値の大きさがX量の商品Aの価値の大きさより大きかろうと小さかろうとどうでもいい、というものではないのである。

②についても同じことが言える。現にマルクスは、次のように述べているのである。

「『20エレのリンネル＝1着の上着または、20エレのリンネルは1着の上着に値する』という等式は、1着の上着に、20エレのリンネルに含まれているのとちょうど同じ量の価値実体が含まれているということ、したがって両方の商品量に等量の労働または等しい労働時間が費やされているということを前提する。」(Ebenda, S. 67. 傍点—引用者。)

また、当の「価値尺度」論のところでも、次のように述べてあるのが見られる。

「価値尺度機能のためには、ただ想像されただけの貨幣が役立つとはいへ、価格はまったく実在の貨幣材料によって定まるのである。たとえば1トンの鉄に含まれている価値、すなわち人間労働の一定量は、同じ量の労働を含む想像された貨幣商品量で表わされる。」(Ebenda, S. 111. 傍点—引用者。)

もちろん、「原典に即した手がたい安定感のある解釈」³⁷⁾をものされることでつとに定評のある三宅氏であつてみれば、そんなことは百も承知のことではない。然るに、それにもかかわらず氏が①・②の如く言われるのは、まさしく、③の点で氏の所説が根本的に問題を孕んでいるからにはかならない。三宅氏が、“一定量のある商品の価格が一定量の金である場合、その金量の価値の大きさがその商品量の価値の大きさに比して大であろうと小であろうと”，と言われるとき、すでに氏は具体的な実際の売買価格（現象レベルの価格）を表象に思い浮かべ

37) 川合一郎編『金融論を学ぶ』有斐閣、1976年、6ページ。

られているわけであるが、そうした価格が真実その商品の価値の大きさを表現するものであるとするならば、その場合には、たしかにその商品量とその金量の「双方に含まれている社会的必要労働時間が等しいことを必ずしも意味し」ないし「商品の価値の大きさが大きさどおりに金の分量で表現され」ているわけでもないにもかかわらず、依然としてその商品量の価値の大きさが表現されていることになるわけであるから、その商品量の価値の大きさとその金量の価値の大きさととの関係を云々することは、全く無意味だということになるであろう³⁸⁾。マルクスの度重なる指摘にもかかわらず三宅氏が上にように主張されるのは、そこに依り拠を見出されているからにはかならないのである。かくて三宅氏は、次のように断言されることによって、貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの「第1規定」を真向から否定し去られるのである。すなわち、「往々誤って解されているように、金の価値をもって諸商品の価値を測定するのではない。」³⁹⁾と。

もっとも、そうは言っても、三宅氏もマルクスが現に明言していることを完全に無視されるわけにはいかない。氏は、マルクスが「すべての商品がその交換価値を金で、一定量の金と一定量の商品とが等しい大きさの労働時間をふくんでいる割合におうじて測るから、金は価値の尺度となる。」⁴⁰⁾と述べている個所を引用され

て、次のように解説されているのである。

「諸商品が自分に金のどれだけかの量を等置する場合、いいかえれば、それだけの金とひきかえに自分の商品を売りたいとする場合、自分の商品とその金量とが等しい労働時間を含んでいるとして等置するわけである。〔中略〕上の『経済学批判』での記述はそういう意味で記されているのであって、これをA商品×量=金Y量というA商品の価値表現において、この等式の両辺の労働時間（それ

次のように言われる。

「すべての商品は全体の中から一商品（金）を排除し、この排除された商品（金）価値で、諸商品価値量が測定されることによってはじめて、諸商品の価値量はそれと等しい価値量をもつ排除された一商品（金）の分量名で表現される。」（同氏著『貨幣と信用』新評論、1974年、115ページ。傍点一下平尾氏。）

見られるとおり下平尾氏は、貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの「第2規定」のみならず、彼の「第1規定」にも即しておられる。この限りでは、氏のマルクス解釈は全く正当なものであると言ってよいのであるが、問題は、貨幣の価値尺度機能がそのようなものであるなら、何故に価格は価値量から乖離しうるのか、という点にある。その点について、下平尾氏は次のように言われている。

「価値からの価格の乖離は、金が価値尺度として機能していないことを証明するのではなく、逆に、金が価値尺度として機能していることを証明する……。なぜならば、①商品価値の金分量による表現が、偶然的、一時的な不確定要素の入りこむ可能性をあたえるからである。②もし、商品価値の大きさが、他の一商品量で表現されるのではなく、商品を生産するのに社会的に必要な労働時間によって表現されるならば、価値と価格との一致や乖離は問題とならないだろうからである。金が価値尺度として機能することによって、価値と価格の乖離が生じるのである。」（同前、115ページ。①・②は引用者が便宜上付記した。）

氏の言われる如くまこと「金が価値尺度として機能することによって、価値と価格の乖離が生じるのである」ならば、貨幣の価値尺度機能についてとやかくと論議するまでもない。けれども残念なことに、下平尾氏のそうした主張は何ら証明されていないのである。なるほど氏は氏の主張の証明として①・②の点を挙げられてはいるが、まず

38) ところが、不思議なことに、抽象的な価格が論じられるレベルではこのように商品価値と金価値を努めて切り離そうとする通説的価値尺度論に立脚する通説的インフレーション論は、インフレというような具体的な価格現象が論じられるレベルでは、逆に商品価値と貨幣価値とを努めて直結するのである。まさに逆でなければならないのではあるまいか？

39) 三宅①、237ページ。

40) Karl Marx, *Zur Kritik der Politischen Ökonomie*, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 13, S. 50. カール・マルクス『経済学批判』（『マルクス＝エンゲルス全集』第13巻所収《杉本俊郎訳》）、49ページ。傍点＝マルクス。因に、下平尾勲氏は、かかるマルクスの叙述を引用されて、

を生産するのに社会的に必要な労働時間)が等しい、つまり両辺の価値量がイコールであると述べているのであるとか、金が価値尺度として機能するというのは、その価値の大きさをもって諸商品の価値の大きさを過不足なく測定することなのだ、というように理解されてはならない。」⁴¹⁾

言うまでもなく、ここでの三宅氏の解釈の眼目は、 x 量の商品Aが自分に y 量の金を等置する場合、その x 量の商品と y 量の金とが「等しい労働時間を含んでいるとして等置する」のだ、とされる点にある。しかしこうした理解の仕方は、二重の誤りに陥っていると言わなければならない。

第1。マルクスは、「諸商品が自分に金のどれだけかの量を等置する場合」、自分とその金量とが「等しい労働時間を含んでいる[もの]として等置するわけである」とは、毛頭考えていない。マルクスは、周知のとおり「貨幣の考察では、商品はその価値どおりに売られるということを仮定した」(K. III, S. 203)のであって、かかる仮定に立って、「A商品 x 量 = 金 y 量」というA商品の価値表現において、この等式の両辺の労働時間(それを生産するのに社会的に必要な労働時間)が等しい、つまり両辺の価

値量がイコールであると述べているのである。この点はすでに上で見たところなのであるが、マルクスはまた別の個所では次のようにも述べている。すなわち、「商品の価値が貨幣に翻訳されたものが商品の価格なのだが、それは暫くはただこのように価値とは単に形態的に区別されるものとして現われるだけだ。」⁴²⁾ と。マルクスが問題にしているのは「商品の価格は貨幣で表現されたその価値にほかならないという法則」⁴³⁾ なのだ、ということが銘記されなければならない。

第2。マルクスは、商品所有者がある量の「金とひきかえに自分の商品を売りたいとする場合、自分の商品とその金量とが等しい労働時間を含んでいるとして〔自分の商品にその金量を〕等置するわけである」とは、やはり毛頭考えていない。マルクスはこう言っているのである⁴⁴⁾。「生産物交換者たちがまず第一に実際に

42) マルクス・エンゲルス(岡崎次郎訳)『資本論書簡』(1)、大月書店、1971年、250ページ。傍点—マルクス。

43) カール・マルクス(岡崎次郎訳)『直接的生産過程の諸結果』大月書店、1970年、161ページ。

44) 三宅氏も言われる。「交換当事者にとってはどれだけの量の貨幣に転形しうるか、貨幣でどれだけの量の商品を購入しうるかは多大な関心事たらざるをえない。実際の商品流通にはこうしたことが絡みついて現われている。」(同氏稿「貨幣の研究方法与貨幣の形成」《遊部他編、前掲書、所収》、225ページ)と。しかし、「絡みついて現われている」とされている点、どうであろうか? 氏の言われる主旨は、 $W_1 - G - W_2$ には「こうしたことが絡みついて現われている」が、マルクスはそうした「考察の対象をいたずらに混濁させるにすぎない」(同前)要因を捨象して過程を「純粋な姿」において考察している、とされる点にある(同前、224—225ページ参照)わけであるが、交換当事者たちの「多大な関心事」について言えば、「こうしたこと」は $W_1 - G - W_2$ に「絡みついて現われている」ものではなくて、 $W_1 - G - W_2$ は、まさに「多大な関心事」に即した交換当事者たちの行動を通してのみ進行しうるのである。だから、「多大な関心事」は $W_1 - G - W_2$ の現象に関わる事柄であり、「こうしたこと」を捨象するということは現象の背後にあっ

②について言えばそれはこの際何の役にも立たないこと、明白であろう。かといって、①が何らかの役に立っているわけでもない。なぜなら、下平尾氏の言われるところでは金の価値で「諸商品の価値量が測定されることによって初めて」諸商品の価値量は表現されるのであるが、「商品価値の金分量による表現が偶然的、一時的な不確定要素の入り込む可能性をあたえる」ものとすれば、かかる「偶然的、一時的な不確定要素」は初めから入りこんでいるとみるほかなく、さすれば「諸商品の価値量は正確には測定され」えないのであって、「諸商品の価値量はそれと等しい価値量をもつ排除された一商品(金)の分量名で表現される」などということは、元来望むべくもないことにならざるをえないからである。

41) 三宅義夫「貨幣または商品流通」(種瀬茂他編『資本論体系 2』有斐閣、1984年、所収。以下、「三宅②」と略記)、70—71ページ。

関心をもつのは、自分の生産物とひきかえにどれだけの他人の生産物が得られるか、という問題である。」(K. I, S. 89. 傍点一引用者)と。だから彼らは、自分たちの商品に含まれている価値量(社会的必要労働時間)に直接関心を持つわけではなく、ましてやひきかえに入手しうる金量に含まれている社会的必要労働時間(価値量)などには直接の関心を持たないのであって、直接にはただ交換価値の大きさに関心を持つだけなのである。A商品の所有者がY量の「金とひきかえに自分の商品〔x量〕を売りたいと〔してA商品x量=金Y量と〕する場合」、そこに直接に行われていることは、彼が自分の商品x量の交換価値の大きさをY量の金で表現している、ということにはほかならない。マルクスの言うように、「労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の現象的な運動の下に隠れている秘密なのである。」(Ebenda.)

B

このように、「金の価値をもって諸商品の価値を測定するのではない」という観点からなされた三宅氏のマルクス解釈は、逆に、氏が、価格の現象(そこでは価格は直接には価値の大きさをではなく交換価値の大きさを表現するにすぎない)の問題と、そうした現象的な価格の運動の下に隠れている価格の法則(「商品の価格は貨幣で表現されたその価値にほかならないという法則」)の問題という、次元の異なる二つの問題領域を明確には区別されていない、ということを示す結果になっているわけであるが、氏にあってはそれも当然のことではなければならない。と言うのは、先に見たとおり三宅氏は、具体的な実際の売買価格にあっても直接に価値が表現されているとみなされるのであ

てそれを規制する法則を「純粋な姿において」考察することなのであって、何か「絡みついて現われている」不純物を取り除くというようなことではない。この点、三宅氏の所説においては必ずしも明確にはされていないのである。

て、そうした氏の見地からは、上の二つの問題領域はもともとと区別さるべくもないからである。しかし、この二つの問題領域を明確に区別してかかるのでない限り、これまで見てきたようにマルクスの所説が合理的に理解できないばかりでなく(あるいは理解できないがゆえに)、およそ貨幣の価値尺度機能を把握するということがもはや望むべくもないことにならざるをえない。現に三宅氏は、次のように言われざるをえないのである。

「価格は価値の大きさの表現であるが、そして価値尺度として機能する貨幣商品の価値変動はすべての商品価格に影響を与えるが、しかし価格の大きさを決定するのは価値尺度としての貨幣の機能の外部に存在している諸事情——直接には、簡単にいえば需要供給——である。価値尺度としての金は価格の大きさを表現するのであって、その大きさ自身を決定するものではないのである。」⁴⁵⁾

氏はまず、「価格は価値の大きさの表現である」と言われる。価値の大きさを表現するわけであるから、表現されるべき価値の大きさは所与のものである⁴⁶⁾。さすればその価値の大きさを表現するためには当然にその大きさが測定されて然るべきなのだが、三宅氏は「測定する」ということを頑として否定される。しかし、所与の量を、計ることなしに表現するなどということは、普通には到底なしうるところではない。それがどれだけの大きさであるかを知ることなしに、その大きさはこれこれだと表現することはできない⁴⁷⁾。自明のことである。

ところがここに、価格の大きさは「直接には、簡単にいえば需要供給」によって決定され

45) 三宅②, 72ページ。傍点一引用者。

46) 「諸商品が自分たちの交換価値を独立に貨幣で、第三の一つの商品で、ただ一つの商品で、表わすためには——すでに商品価値が想定されているのである。問題はただそれを量的に比較することだけである。」(Theorien III, S. 131.)

47) 「商品と金とが、または任意の二つの商品が、諸価値として、同じ単位の表示として、互いに相手で自分を表現することができなければ、それぞ

る、という周知の事実がある。かくて三宅氏は言われるわけである。「価格は価値の大きさの表現であるが、……しかし価格の大きさを決定するのは……直接には、簡単にいえば需要供給……である。」と。氏はこうして、「価格は価値の大きさの表現である」という法則レベルの命題と、“価格の大きさは「直接には、簡単にいえば」需要供給によって決定される”という現象レベルの命題とを、「が、しかし」で結んでみせられるわけであるが、両者のレベルの違いを明確にされないのが、問題は一向に片付かない。「価格は価値の大きさの表現である」ならば、何故にそれは商品の価値の大きさと金の価値の大きさとの比率によって決定されないで、需要供給によって決定されるのか？ また、三宅氏は「価値尺度としての金は……〔価格の〕大きさ自身を決定するものではない」と言われるのであるが、価格が金の価値の大きさに関わりなく「直接には、簡単にいえば需要供給」によって決定されるのであるならば、何故に「貨幣商品の価値変動はすべての商品価格に影響を与える」のか？

三宅氏が「金の価値変動はすべての商品〔価格〕に同時に、一様に、比例的に、影響を与える」⁴⁸⁾と言われるとき、氏が暗黙の内に、貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの「第1規定」に依っておられるのだ、ということは明白であろう。法則レベルの価格が“金の価値量を尺度として諸商品の価値量を測定し、かくして諸商品の価値量を応分の金量で表現する”ものであるからこそ、法則としては「金の価値変動はすべての商品〔価格〕に同時に、一様に、比例的に、影響を与える」と言うことができるのである。してみれば、法則のレベルでは、「価値尺度としての金〔の価値の大きさ〕は……〔価格の〕大きさ自身を決定する」と言わなければなるまい⁴⁹⁾。

れの商品価値を金で表現するという問題は解決不可能であろう。」(Ebenda, S. 132.)

48) 三宅義夫『貨幣信用論研究——「資本論」研究——』未来社、1956年、21ページ。

ところが、三宅氏にあっては法則の問題と現象の問題の区別が明確でないから、氏は、価格の大きさが金の価値の大きさによって決定されるということを否定されて、逆に、「価値尺度としての金は価格の大きさを表現するのであって、その大きさ自身を決定するものではないのである。」などと面妖なことを言われてしまう。いったい、氏の規定では「商品の価値を金で表わしたものが、その商品の価格である」のではなかったか？「x量の商品Aの価値の大きさはx量の商品A=y量の金として表現されるのである」から、x量の商品Aの価値の大きさが表現されることによって、すでに価格の大きさはy量の金として与えられている。然るに三宅氏は、「価値尺度としての金は〔価値の大きさの表現である〕価格の大きさを〔さらに〕表現する」と言われるのである⁵⁰⁾。何とも理解し難いことだと言わざるをえない。

49) 「この〔上着とリンネルとが交換されうる〕割合は、リンネルの価値量が与えられているのだから、上着の価値量によって定まる。」(K. I. S. 70.)

50) 大島雄一氏は、「貨幣が価値尺度として機能するということは、正確に言えば、貨幣が価格計算の尺度として機能することを意味するのであって、けっして文字どおりの価値〔社会的必要労働量〕の尺度として機能することを意味するものではない。」(同氏稿「貨幣の機能について——とくに価値尺度機能の意味について——」《名古屋大学『経済科学』第9巻第3号所収》、141ページ。傍点—大島氏)と述べられることによって、マルクスの「価値尺度」論を根本的に否定される。氏はその所以を次のように説明されている。

「たとえば $A \cdot x = 200G$ なる価値表現が与えられたとしよう。この場合A商品x量は貨幣商品200単位に等しいことが示されるのであるが、このことは、商品所有者甲・乙あるいはA商品販売者群とA商品購買者群がそれらを等価として認めあったことを意味するにすぎないのであり、A商品x量の価値〔社会的必要労働量〕と200Gの価値〔社会的必要労働量〕が等しいことを意味するのではけっしてない。すなわち右の価値表現は、A商品x量の市場価格の決定を意味するにすぎないのである。だから貨幣の価値尺度機能とは、価格計算の尺度としての機能をいうにすぎない。」

む す び

以上私は久留間鮫造・三宅義夫両氏の所説を検討してきたのであるが、そうした作業を通じて私がまず第1に確認せざるをえないことは、両氏がいずれも、自説に反するマルクスの叙述を徹底的に無視されているという事実である。両氏とも、「金の第一の機能は、商品世界にその価値表現の材料を提供すること」にある、というマルクスの叙述（「第2規定」）に依っておられるわけであるが、その叙述のすぐ後でマルクスが「すべての商品が価値としては対象化された人間労働であり、したがって、それら自体として通約可能だからこそ、すべての商品は、自分たちの価値を同じ独自の一品で共同に計ることができるのであり、また、そうすることによって、この独自の一品を自分たちの共通な価値尺度すなわち貨幣に転化させることができるのである。」と述べている個所（「第1規定」）を直視されようとしなさい。しかしそれも、

（同前、141—142ページ。）

氏はまず、「たとえば $A \cdot x = 200G$ なる価値表現が与えられたとしよう。」と言われる。ところが実は「右の価値表現は、 A 商品 x 量の市場価格の決定を意味するにすぎないのである。」もちろん、かかる市場価格は「 A 商品 x 量の価値〔社会的必要労働量〕と $200G$ の価値〔社会的必要労働量〕が等しいことを意味するのではけっしてない。」だから貨幣は価値の尺度なのではなく、価格計算（？）の尺度なのだ、と言われるわけである。氏もまた、価値表現という価格の法則の問題と、市場価格という現象の問題とを、同一レベルで論じられていること、明白であろう。氏は「等価」という言葉を用いられているのであるが、その際の「価」とは何であろうか？ それは交換価値の謂にほかならないのであって、したがって氏は、「 $A \cdot x = 200G$ 」が「正確に言えば」実は「価値表現」なのではなく交換価値の大きさの表現なのだ、ということを明確にされるべきだったのである。そうされていれば、マルクスが問題にしている事柄と氏の論じられている事柄とのズレを看過されることはなかったであろう。

以上の検討の内に明らかなように、理由のないことではなかった。両説においては、価格の法則の問題と価格の現象の問題という次元の異なる二つの問題領域の明確な区別がないために、法則レベルの価格は価値の大きさを表現するものであるのに対して、現象レベルの価格は直接にはただ交換価値の大きさを表現するものたるにすぎない、という区別が見失われるばかりでなく（あるいは見失われるがゆえに）、「商品の価格は貨幣で表現されたその価値にほかならないという法則」を論じている際のマルクスの論理は、まるで理解し難いものにならざるをえないのである。久留間氏が本来の「量の問題」さえをも原理的に排除され、三宅氏が「金の価値をもって諸商品の価値を測定するのではない」と主張されたのも、そのためであったと言ってよい。

しかしマルクスは、「量の問題」を離れて「質の問題」を論じているのでもなければ、商品の価値は計量されえないものだとしているわけでもない。マルクスの洞察するところ、「諸商品としての諸生産物の交換は、労働を交換し、各人の労働が他人の労働によって定まる一定の方法、社会的な労働または社会的な生産の一定の様式」なのであって、そこでは、社会成員の「いろいろな欲望量に対応する諸生産物の量」に規定される「一定の割合での社会的労働の分割の必要」という「自然法則」が、それに特有な仕方で実現されるのでなければならない⁵¹⁾。そこでマルクスは、「自然法則」が商品経済的に実現される特有な仕方として、「商品の価格は貨幣で表現されたその価値にほかならないという法則」を論定しようとするわけである。その場合、「自然法則」が商品経済的に実現されるためには、諸商品の生産に社会的に必要な労働時間が何らかの仕方で表示されるのでなければならないこと、言を待たない。かくてマルクスは、商品の生産に社会的に必要な労働

51) マルクス＝エンゲルス（岡崎次郎訳）『資本論書簡』(2)、大月書店、1971年、162—163ページ参照。

働時間を価値の実体をなすものとして措定し、かく実体をもって規定される価値の大きさが商品経済にふさわしい仕方ではいかに表示されるか、ということ論理的に追求する。無論、価値形態論がそれなのである。

ところが、こうしてマルクスは「生産当事者たちにたいして、圧倒的な、彼らが無意識的に支配する自然法則として現われ、彼らに対立して盲目的な必然性として力をふるう」(K. III, S. 839) 法則的關係を論定しようとしているのであるにもかかわらず、宇野弘蔵氏はそこに商品生産者たちの日常的な意識を持ち込まれる。すなわち、「商品価値の貨幣形態、いいかえれば価格は、いわばなおその商品所有者の私的な、主観的評価にすぎない。」⁵²⁾ と。たしかに、現象レベルの価格について見れば、宇野氏の言われるとおりなのである。したがって問題は、法則レベルの価格を論じているマルクスの所説を批判するに宇野氏が現象レベルの価格を以てされるところにそもそもあるわけであるが、宇野氏と同様に価格の法則の問題と価格の現象の問題とを明確に区別することをされない久留間氏や三宅氏は、宇野説に反発されるあまり(か)、現象レベルの価格を念頭におかれながらなおかつマルクスの所説を擁護しようとする。両氏が、現象レベルの価格においても価値が直接に表現されている、と主張されるのも、そのためだと言ってよかろう。

だが、そうして現象レベルの価格をしも直接に価値を表現するものと見誤ることによって、マルクスの所説が擁護されえないのみならず、却ってマルクスの所説を根本のところまで理解しえないことになってしまわざるをえない。マルクスは言っているのである。「もし事物の現象形態と本質とが直接に一致するものならばおよそ科学は余計なものであらう」(K. III, S. 825. 傍点—マルクス) と。

現象レベルでは、商品の価値性格は商品の交換価値性格という形態をとってしか現われえな

いのである。そこでは商品は(その所有者にとって)「直接にはただ、交換価値の担い手であり、したがって交換手段である」(K. I, S. 100) にすぎない。だから「生産物交換者たちがまず第一に実際に関心をもつのは、自分の生産物とひきかえにどれだけの他人の生産物が得られるか、つまり生産物がどんな割合で交換されるか、という問題である」のは当然のことであって、それゆえ彼らは、自分たちの商品の交換価値の大きさを貨幣との交換割合として一般的に表現しなければならないのである。これが現象レベルの価格なのである。

しかし、「交換価値はある物に投ぜられた労働を表わす一定の仕方」(ebenda S. 97) にほかならない。交換価値の大きさを評価し表現するというのが、価値の大きさを測定し表現するための唯一妥当な社会的な仕方なのである。そして、交換価値を評価し表現するということ、当事者たちがそれと意識することなしに価値を測定し表現しようとしていることにはほかならないからこそ、「商品の価格は貨幣で表現されたその価値にほかならないという法則」が、「商品の価格は貨幣で表現されたその交換価値にほかならないという現象」をつうじて、「生産当事者たちにたいして、圧倒的な、彼らが無意識的に支配する自然法則として現われ、彼らに対立して盲目的な必然性として力をふるう」ことにもなるわけである。

事柄のこうした区別と連関を見失いさえしなければ、法則レベルにおける貨幣の価値尺度機能についてのマルクスの「第1規定」は自然に理解されうであろうし、現象レベルでは交換価値の尺度として機能するということが、貨幣が価値の尺度として機能する唯一妥当な社会的な仕方なのであり、金の価値を尺度として諸商品の価値を計量するという法則は、貨幣の「交換価値」を尺度として諸商品の交換価値を評価するという現象を通してのみ貫かれうるのだ、ということも容易に了解されうであろう。かく期待しつつ、一応の「むすび」としたい。

(昭和60年2月12日受理)

52) 『宇野弘蔵著作集』第4巻、岩波書店、1974年、55ページ。